生存科学研究ニュース

VOL. 6. NO. 6.　　1991. 11. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所
〒104　東京都 中央区 銀座4−5−1
聖書館ビル 303
電話　03−3563−3518

第3回　武見記念賞　授賞式
レオンチェフ・中尾両氏　受賞

公益信託武見記念生存科学研究基金が、生存科学に関連する分野で顕著な研究または実践の業績を上げた方に贈る武見記念賞の授賞式が11月1日（金）生存科学研究所会議室において行われた。去る9月12日の第2回表彰助成委員会において、10名の被推薦者からニューヨーク大学のW．レオンチェフ教授と自治医科大学中尾喜久学長が選ばれた。

授賞式は恒例は12月であるが、今回はレオンチェフ教授来日の日取りに合せて11月1日に行われた。

レオンチェフ教授は産業連関分析の創始者として有名であるが、今回はその手法で公害・保健・医療分野の分析を進めたことで、中尾学長は教育を通して地域包括医療の理念と実践を進めたことで、それぞれ受賞した。

平成3年度第3回　医薬問題研究会
日本の医薬品評価機構における現状と問題点

9月2日（月）午後3時より、研究所会議室において平成3年度第3回医薬問題研究会が開催され、日本製薬工業協会専務理事代田久米雄氏が表記の演題で発表した。

＊　＊　＊　＊

わが国で承認されている新薬の研究費投入額は売り上げの10％を超えている。国内オリジンの新薬申請に必要な資料を揃えるには10年の歳月と100億円程の費用がかかる。

これらを申請に必要な添付資料や、GCPの主要着目点など、具体的に説明し、さらに国際ハーモナイゼーションの動きと検討するべき内容、研究振興の施策、日本の医薬品に対する批判等につき述べた。

最後に今後の問題として、日本の臨床試験では基準薬にInactive Placeboを使わずActiveな標準を使うことが多い点、主要なデータの海外公表が少ない点、臨床治験に際し例数のわりに施設数が多すぎる点、有用性の評価の方法、2重盲験法のありかた等を上げ、日本では個々のデータは非常に優れているが、全体をどう評価するかという方法の点で検討の余地があると指摘した。

第1回　人間・文化・文明研究会

9月19日（木）午後2時より、研究所において第1回「人間・文化・文明」研究会が開催された。

この研究会は、従来の幾つかの研究会の成果を総合するために新たに発足する幾つかの研究会の一つで、「生存と文明」、「健康と

経済」、「環境・保健・産業問題」の各研究会との総合的検討の場であり、座長は板垣顧問が務める。今回は「生存と文明」研究会の責任者、八千代国際大学経済学部高瀬教浄授から以下のような発表がなされた。

＊　＊　＊　＊

人間とは何か、その属性により位置付けて考えることが必要であり現実感覚と理論感覚の両者の併立が必要であると考えている。

これまで科学には人間のための科学という視点が欠けていた。「人間」のトータルな認識が必要である。ヒューマン・リソーシスに関心を持っているが情報化社会で重要な知的資源の問題から教育の重要性が考えられる。

現代への視点としては、人間活動のグローバル化、人間の宇宙観や世界観の変化等、グローバリゼーション化と、学際的研究、企業の業際化、国境の壁が低くなるという意味での国際化という、クロースドでないオープンなアプローチが必要と考えられる。

社会経済の課題は、安定と進歩、人類生存と地球環境の問題であり、自然と人間と技術の組みあわせをどうするかということである。それは文明の形を決めることである。

社会史的変化から見ても現代社会は変動期に入っている。新しい人間像は何か。それを決めないと新しい社会像は描けない。人間には向上心がある。それに従う欲求の存在形態として、自然的存在としての人間の欲求、意識的存在としての人間の欲求、社会的存在としての人間の欲求があり、それに対応して自然科学、人文科学、社会科学があるが、その総合が必要であ。それは人間の根源を問うもので、「生存の理法」ではなかろうか。それには並列ではなく重層化が必要であり、「根源的人間とは何か」をグループとして見直すことが必要である。

＊　＊　＊　＊

討議で「健康と経済」研究会責任者の江見教授は、経済学は複雑なものを除いて抽象化し、本質を見ようとしてフレームワーク化してきたが、そこで終わってしまった。その後もう一度肉を付ける努力が必要であり、感性や直感を入れる必要がある、と述べた。

次回は、座長の板垣顧問が意見を発表する予定。

第４回環境・保健・産業問題研究会
産業保健からみた保健問題

１０月１４日（月）午後２時より第４回環境・保健・産業問題研究会が開催され、新規参加の新日鉄君津製作所田中茂委員が「産業保健からみた保健問題」と題して発表をした。

＊　＊　＊　＊

まず、新日鉄君津製作所における労働環境、労働作業過程、労働災害、難病について的確な説明を加えたあと、総合健康管理システムによる製作所作業員６，０００人の健康管理の実際と、それにもとづくデータによる特徴の説明がおこなわれた。

ついで、昭和６０年に全社員のオンライン化、一元化が完成し、制度管理もきちっと出来ているが、システムの維持・管理のコストは相当掛かり、コスト・ベネフィットの視点から見てどう考えるべきかについては難しい問題が残ると指摘した。

＊　＊　＊　＊

討議に先立って、研究所の小平専務理事より、産業保健問題は生存研の研究過程を集約的に表わすものであり、全勢力を投入して行っていること、そして「激変する産業社会」と「地域・住民の健康政策」を統合することの重要性について説明があった。その後討議により、産業保健と地域包括医療のつなぎ方と、コスト・ベネフィットを健康投資の視点から展開することの重要性が合意された。

平成３年度第３回　家庭問題研究会
地域包括医療における家庭と経済

１０月２２日（火）午後６時より第３回家庭問題研究会が開催され、早稲田大学社会科

学部田村貞雄教授が表記のテーマで以下のように発表した。

＊　＊　＊　＊

現代経済学と現代医学は方法論が違いすぎている。医療の本質に叶った本当の医療経済（医療福祉経済と呼びたい）は、はたして成立可能であろうか。嘗ては否定的であったが「医療資源の開発と配分」の考え方と、日本の地域医療の実践がヒントとなって、成立可能と考えるようになった。

武見医学は、医学文化の高揚による国民（世界）福祉の向上を目標に、人類の生存の理法を探究し実践するというもので、人間の環境変化へのパッシブならびにポジティブ・アダプタビリティーによる適応行動が生存の健康なバランスを保つと考える。この考え方に基づく地域社会の適応力モデルから共生の価値観が導き出せ、地域社会の経済システムが形成され得ることになる。

武見太郎の医療経済的実践は、医学研究と国民福祉の統合、医師と患者の人間関係の確立、自由社会における診療報酬体系の確立、医療保険の抜本的改正（バイオインシュランスの確立）の４っの柱から成る。

地域包括医療が集大成されている大分市医師会の技術集積型健康開発システムや、それに産業保健を統合したシステムを形成し、そこでの健康投資により、学問的には、これらの実践の学問的基盤となる生存科学のパラダイムのなかで、現代医学と現代経済学とを人間を根幹として結合させた医療福祉経済学が成立可能であると考え、実践的展開により実証したいと考えている。

＊　＊　＊　＊

次回は、１２月２０日（金）。永井委員による「老人保健の諸問題」

第１回　「生死と生存」勉強会
生死と生存を考える

１０月２６日（土）午後２時より、第１回「生死と生存」勉強会が開催された。これは会員が、自分の意志で参加し徹底的な討論が出来るようにしたもので、そのため勉強会と言う名称を付けている。同様な勉強会は今後いくつか出来る予定で準備が進んでいる。

会の性格上外部から話をして頂く方を招いても、それを講師と呼ばずゲストと呼んで、一緒になって討論するという姿勢を明確にしている。今回のゲストは産業医科大学哲学担当の本多正昭教授。なおレギュラーメンバーには卜部（責任者）、大林、青木、藤川の諸氏が当たる。

＊　＊　＊　＊

ゲストの本多教授は、生存科学研究所が生死を考えることの重要性を述べ、生死は連続のものであり、生死を分けて考えることにより無批判な生への執着を生み、かえって生命の尊重観が薄れ、人間の貧困化に拍車を掛ける、と述べた。また、キリスト教はギリシャ哲学の２元論に侵食され、本来の考えからはずれた人間観をもっていると誤解されるようになった。仏教哲学は心身２元論はとっていない、東洋では連続的世界観が強く、道元は不一不二を説いている。それは「即」であり、違うものが違うままに結合しているということで、意識や思考の理論ではなく実在の構造である。生存と生態系との関係もこの「即」に当たる。人間は生態系のなかに生かされているのである、と述べた。

討論では、死や生死一如について、キリスト教本来の考え方について、人間と動物の意識について等々熱心な討議が展開された。

東北研究プロジェクト現地研究会
岩手県岩泉町訪問

これまで北上プロジェクトと称してきた実践的研究は、その範囲が東北全体に及ぶ計画に拡がったため、今回「東北プロジェクト」と名称を変更することに決まった。

前回の岩手県訪問で岩泉町安家地区を視察したが、その地域の自然環境・社会環境を見直し生存モデルを構築するためには、安家だ

けではなく、岩泉町全体から見直さなければ出来ないし、それを含むより広域の宮古２次医療圏という広がりで見なければならないと理解されたので、今回、１０月２３日（水）研究所専務理事と常務理事が岩泉保健所を訪問、宮古保健所長も兼任する橋本所長、佐々木次長、岩泉済生会病院柴野院長、安家の玉沢氏、嘉村女史、安家小学校の田崎教諭等と研究会を開催した。

橋本所長は、宮古医療圏の医療計画の他、花巻保健所長として沢内村を含む中部医療圏の医療計画も策定した経験をもち、今回はそれ等の経験特に岩泉に済生会病院を拠点として医療体制を強化した経験について話した。

その後参加者一同で、医療・保健を基盤にした生存モデルの構築への今後の取組を討議した。後半には田野畑村診療所将基面診療所長も多忙な時間をやり繰りして参加された。

第２回生存科学シンポジウム『生存科学における発展・Ⅱ』予　　報

平成３年度の生存科学シンポジウム（第２回生存科学シンポジウム）は、昨年度に引き続き『生存科学における発展』をメインテーマとして、下記の要領で開催される。

＊　＊　＊　＊

日時：平成４年１月１８日・土曜
（午前・午後）

場所：千代田区紀尾井町上智大学講堂
（昨年と同じ場所）

プログラム：特別講演ならびに総合討論
（総合討論は、昨年のように会場を分けずに参加者全員が一同に会し行う）

午前：特別講演

特別講演（１）
講師：　沼田　真　千葉大学名誉教授
自然保護協会会長（生態学）

特別講演（２）
講師：　藤沢令夫　京都大学教授
（科学哲学）

午後　：総合討論

総合討論に先立つ話題提供者

（１）家庭問題研究会
早稲田大学（心理学）
小嶋謙四郎教授

（２）東西の健康観・医・薬勉強会
武見フェロー
東京医科歯科大学
難治疾患研究所
津谷喜一郎助手

（３）生存と文明研究会
八千代国際大学（経済学）
高瀬　浄教授

ハーバード大学武見講座活動報告

報告者　門司フェロー

武見セミナー

9/16 Determinants of Health in the Twentieth Century and the Epidemiologic Transition /H.Fineberg

9/23 In Search of a Contemporary Theory for Understanding Mortality Change /L.C.Chen

9/30 Workers and Health in the Third World / M.R.Reich

10/7 Spread of AIDS in Northeastern Thailand - The Role of Prostitutes /U.Brinkmann

武見フォーラム

10/17 Non-governmental Organizations in Africa's Development ;Roles and Accountability/A.Fowler

10/24 The Health Crisis in Africa /F. K.Nkrumah

人口・国際保健学研究者セミナー

10/21 Bednets and Malaria in West Africa /A.Hill

研究所日報

９月　６日	第２回常務理事会
９月　９日	第３回編集委員会
１０月２３日	武見国際シンポ実行委員会
１１月　１日	第３回常務理事会